

龍谷大学 大学教育開発センター通信

Ryukoku University
Center of Educational
Development Report

2012
02



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

大学教育開発センター | 〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
Tel 075-645-2163 Fax 075-645-2190 <http://www.ryukoku.ac.jp/faculty/fd/index.html>
発行日：2013年3月 編集・発行：龍谷大学 大学教育開発センター



2013, Number 02

CONTENTS

p3

2012年度指定研究プロジェクト成果報告

p4

第8回 龍谷大学FDフォーラム2012

「大学院教育の課題と大学院FD」開催報告

p6

学生FDサロン開催報告

p8

シラバスに関する研修会

「誰のため、何のためのシラバスか～シラバスの書き方、使い方～」開催報告

p10

2012年度大学教育開発センター事業報告

p12

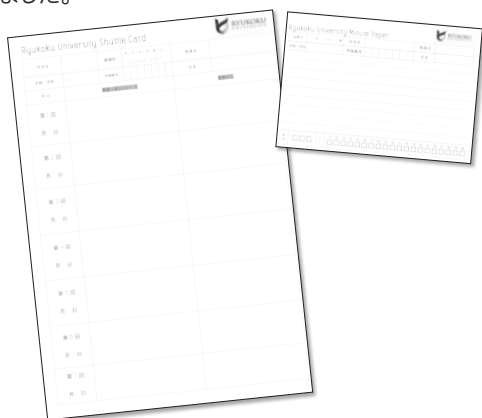
2012年度自己応募研究プロジェクトポスター展示のご案内・新着図書紹介

2012年度指定研究プロジェクト 成果報告

大学教育開発センターでは、大学にとって必要な教育研究を行う指定研究プロジェクト事業を2004年度から実施しています。本年度は3件のプロジェクトを推進しました。

1. シラバスを基盤とした学修システムにおける インタラクティブな教育支援ツールの開発

教職員-学生間のインタラクティブな教育環境の構築のための検討を行いました。研究内容として、大学教育開発センターHPに教育活動を支援する学内の情報へのリンク集の設置を検討した他、現在大学教育開発センター会議で継続審議中の「学修記録（仮称）」の機能を補完する「ミニツツペーパー」について、全国の大学を対象とした調査を行い、龍谷大学版の開発について検討しました。



2. 学びのコミュニティの形成

第7回龍谷大学FDフォーラム2011「学びのコミュニティをデザインする」の内容を受け、本学にとって必要な学修支援環境について検討を行いました。

他大学の事例について視察を行い、今出川キャンパスに大規模なラーニング・コモンズを建築した同志社大学、及び最先端の学修支援環境を持つ東京大学本郷キャンパスの福武ホール、その構想のもとになった駒場キャンパスのKALSを視察し、最新の知見を収集・分析しました。



3. 大学院FDの事例研究

昨年度に引き続き、大学院教育に関するニーズについて検討する基礎的情報の収集を目的として、「大学院生の意識に関するアンケート」（2011年度名称は「大学院FDアンケート」）を、ポータルサイト及び各研究科合同研究室にボックスを設置し、2012年12月に実施しました。約15%の大学院生の回答を得ました。集計結果につきましては、報告書として取りまとめる予定です。

また、大学院FDをテーマとした「第8回龍谷大学FDフォーラム2012」を開催し、神戸大学、同志社大学等の最新の大学院改革の事例について学内で共有しました。



テーマ	代表者	共同研究者
シラバスを基盤とした学修システムにおけるインタラクティブな教育支援ツールの開発	出羽 孝行 (文学部)	安田 圭史 (経済学部)、 小長谷 大介 (経営学部)、 樋口 三郎 (理工学部)、 千葉 晋乗 (情報メディアセンター)
学びのコミュニティの形成	長谷川 岳史 (大学教育開発センター長)	築地 達郎 (社会学部)、 津島 昌弘 (社会学部)、 田岡 由美子 (短期大学部)
大学院FDの事例研究	クラフチック・マリウシュ (経済学部)	中川 修 (文学部)、 外村 佳伸 (理工学部)、 清水 耕介 (国際文化学部)、 河村 由紀彦 (教学企画部課長)

第8回 龍谷大学FDフォーラム2012



「大学院教育の課題と大学院 FD」 開催報告

2012年12月22日、FDフォーラムを開催し、大学関係者を中心として、全国各地から約100名の参加がありました。基調講演として金子元久先生（筑波大学大学研究センター教授、高等教育学会長）をお招きし、「大学院教育の課題」と題し、歴史的経緯、他国との比較等をもとに日本の大学院の持つ特徴、大学院生の就職状況、社会人の大学院進学希望状況等詳細なデータをもとに、私立大学の大学院が抱えている課題について講演いただきました。

事例報告では、現在の状況を主体的に切り拓こうとしている各大学院の取り組みとして、石田徹本学政策学研究科長より、地域公共政策士養成の取り組みについて、神戸大学大学院経済学研究科の藤田誠一先生より、本年度より制度をスタートした学部大学院一貫教育について、また、博士課程リーディングプログラムに採択された同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科の取り組みについて内藤正典先生より報告があり、その後、本学国際文化学部の清水耕介先生をコーディネーターとしてシンポジウムを開催し、専門性と人間育成の関係性等、大学院教育が社会的に要請されている人材育成について討論しました。

長谷川岳史(大学教育開発センター長、経営学部教授)

2012年12月22日に開催されました、第8回龍谷大学FDフォーラム2012に、全国からご参加いただきありがとうございました。



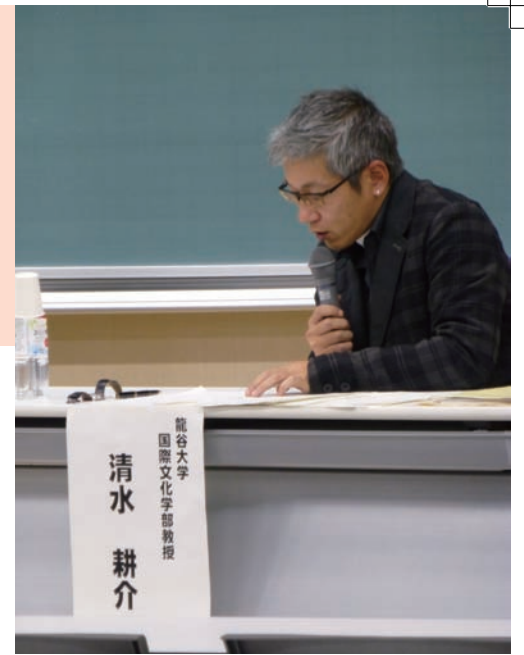
また、基調講演の金子先生、事例報告の神戸大学大学院経済学研究科の藤田先生、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科長の内藤先生、本学大学院政策学研究科長の石田先生、パネルディスカッションのコーディネーターの本学国際文化学部の清水耕介先生、誠にありがとうございました。

龍谷大学FDフォーラムの開催も8回を数えます。このフォーラムは、まず第1に本学が現在抱えている問題に、切り込んでいただくことをねらいとしており、同じ問題意識をもっている学外の方々にも公開させていただいているフォーラムです。ですから、このフォーラムのテーマをみれば、「龍谷大学はこのへんに困っているんだな」とわかるわけです。

今年度のテーマは「大学院教育における課題と大学院FD」としました。

本学でも、大学院教育に関する議論は、ここ数年継続的に行われています。課題は様々ですが、その中に定員の未充足問題があるのも事実です。

多くの私立大学に当てはまると思いますが、教員は学部所属し、学部の土台の上に大学院を設置している場合が多く、



また、学士課程に関する課題も山積していることから、大学院に関して腰を据えて議論する余裕がどれほどあるのかというと、現実的には中々難しいのが現状です。これは大学院FDについてもあてはまります。

課題があることはわかっていて、「改革、改善」とはいうわけですが、どこから手をつけたらよいのか、それがどういう質の問題であるのか、適切に把握できていない現状があります。

改革の方策として、例えば「グローバル化社会の大学院教育」などの答申に答えを求めてしまい、対症療法的に「グローバル化が必要である」といったように議論してしまいがちです。しかし、そもそも「何のために大学院を置いているのか」という目的、「できることとできないことは何なのか」という自らの現状等、主体的な問題把握が抜け落ちた状態では、「本学が実現できるグローバル化の特色」というような議論にはなかなかありません。

報告いただいた事例は、それぞれが各大学の特色を活かし、新設も含め、あらたなスタートを切っているものばかりであり、自主的、主体的に大学、教職員集団が中心となって推進しているものです。

よくFDに関する会議やシンポジウム場でよく聞くのは「答えがなかった」という意見です。しかしながら、答えはそれぞれの大学で見つけ出すものです。マニュアルはどこを探してもありません。

当日のフォーラムは、ご参加いただいた皆様それぞれが、ご自身の所属する大学、ご自身の問題意識にひきつけて、何かしらのヒントを得る機会になったのではと感じております。

もちろん龍谷大学の教職員にとっても同じことが言え、このフォーラムの内容を受けた主体的な議論や行動が問われることを心に留め、我々もこれから様々な課題に取り組んでいきたいと思います。

詳細な内容は、近日発行の「第8回龍谷大学FDフォーラム 2012 報告書」、本学大学教育開発センターのホームページをご参照ください。



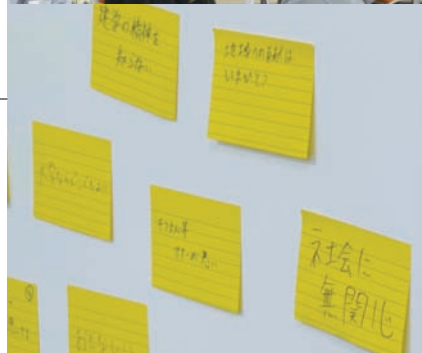
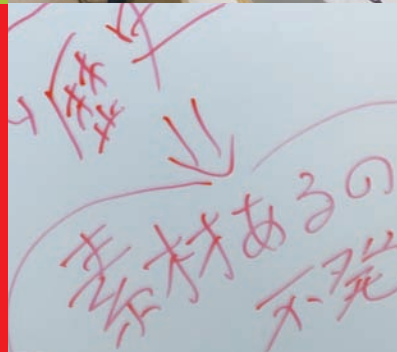
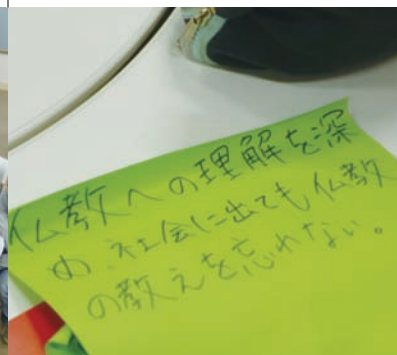
学生FDサロン 開催報告

2012年11月21日、各学部代議員から構成される学友会組織、9学部合同学生会及び学友会中央執行委員会正課局の皆さんと大学教育開発センターが協力し、「学生FDサロン」を開催しました。

当日は、本学の教育活動に係る9学部合同学生会との継続的な意見交換を基に、誇りを持ち社会で活躍できる「龍谷大学生とは」、「龍谷大学らしさ」とは何かについて、学生同士でワークショップを行いました。

自らが考えている「理想の龍大生」と現在の自分のあり方や行動とのギャップ、社会から見た龍谷大学とはどのような大学か、今後どのような行動をしていくべきなのか等、それぞれの現在の大学生活を共有し、意見交換を行いました。

大学教育開発センターとしては、今後も学友会中央執行委員会正課局及び9学部合同学生会との協力を継続し、本学における教育のあり方、教職員及び学生が取り組むべきことについて学生と共に検討を進めていきたいと考えています。





9学部合同学生会代議員(当時) 大上 陽平
(法学部4年)

当日、私は司会者として学生FDサロンに参加しました。

学生FDサロンを初めて開催しましたが、今回の取り組みは成功だったと思います。初の開催であり、参加者の半分以上は「学生FD」という言葉も知らない状態でしたが、3つに分かれたどのテーブルも、会話が途切れることなく盛り上がり良い雰囲気だったと思います。

最終的に全体での意見交換を行いました。今回の結論としては、「建学の精神」や大学の掲げるスローガンを学生自身が消化しきれていないという事だと思います。龍大だからこそ持つ個性・ブランドを学生が感じる事が出来ず、そこから劣等感を感じる学生が少なからず存在するという事です。

我々学生に必要なのは、とにかく目標を持つ事だと思います。龍谷大学に入学した自分はどうなりたいのか。その目標の為に、何を考え、何をすべきなのか、自分という「芯」を持つのが大事だと思います。その「芯」を補強するのに、大学の掲げるスローガンやブランドが役立つのではないかと思います。

私は、学生FDを行う団体の運営者は学生FDが目的になってはならないと考えています。大学を「より良い学びの場」にしたいと思うのはとても大切な事ですが、「より良くなった学びの場」で目指す自分を考えるのも同じくらい大切だと思います。



学友会中央執行委員会正課局長 相良 翔子
(国際文化学部3年)

学生FDサロンに参加し、グループディスカッション形式での議論はあまり経験がなかったのですが、「本当の龍大生像とは？」という1つのテーマに沿ってざっくばらんに気軽にアイデアを発言し、誰かが発したその一言から派生して、新たなアイデアが他の人からレスポンスされるまでの速さとそのやり取りのテンポの良さが心地よく、初めて会った他の参加者の方とも抵抗無く議論することが出来ました。またこの企画を通して、自分1人の視点には限界があり、だからこそ対話が必要なのだということを強く感じました。

この企画に参加させて頂き、今回は学生同士の対話でしたが、今後大学教職員の方々と学生が対話を行う機会がより多く設けられることで、相互の理解が今よりももっと深くなり、その対話を通して共に大学の教育について考えていくことも出来るのではないかと私は考えています。しかしながら、その為には前提として、今自分が受けている教育を学生自身が再度見つめなおすことが求められるでしょう。

今回、そのきっかけを与えて頂き、本当にありがとうございました。

シラバスに関する研修会

「誰のため、何のためのシラバスか ～シラバスの書き方、使い方～」

開催
報告

2012年11月5日、「誰のため、何のためのシラバスか～シラバスの書き方、使い方～」というテーマで、名古屋大学高等教育センターの中井俊樹先生に話題提供とワークショップを行っていただきました。

中井先生には、折り紙を用いて学生に対して何かを伝えることの難しさを体感できるワークショップを実施いただくとともに、シラバスによって授業計画を立てることの教育的効果について、データを用いて説明いただきました。詳細内容は、3月末発行予定の「FDサロン（特別号）」をご参照ください。

長谷川岳史（大学教育開発センター長、経営学部教授）

本学では、建学の精神である「浄土真宗の精神」のもとに、「教育にかかる基本方針」を定め、それを踏まえた「各学部・大学院各研究科の教育理念・目的」に基づく3つの方針（学位授与の方針・教育課程実施・編成の方針・入学者受入れの方針）のもとに、教育を展開しています。

大学教育開発センターでは、2012年1月に大学評価支援室と教学部と共催で、立命館大学教育開発推進機構の沖裕貴先生をお招きし、FDと評価に関する研修会「3つのポリシーの明確化とその評価～何のため、誰のためのポリシーか～」を開催致しました。

そこで、教育に関する理念・目的や方針と、個々の授業運営や成績評価との関係を一連の流れと捉えることの重要性を改めて確認したことを受け、今回はシラバスに焦点をあて、名古屋大学高等教育センターの中井俊樹先生に話題提供とワークショップを行っていただきました。

当日は、非常勤講師の先生方や事務職員の方々も参加し、特にワークショップでは、「書いたつもりでも、言ったつもりでも、伝わっていない」、情報を伝達することの難しさを参加者一同実感しました。

本学では、2013年度より、従来のWebと冊子の併用から、Webシラバスに移行します。本学には、シラバスの意義や目的を明示したものがないように思われがちですが、Webシラバスを導入するにあたり、2006年度に全学教学会議のもとに設置された全学教育改革推進委員会の「IT活用教育部会」において、以下の7つの観点が表示されています。

- ① 教学上の到達目標を明らかにすること
- ② 成績評価の方法を明らかにすること



- ③学生に対してどのような講義を展開しようとしているのか事前に伝達すること
- ④受験生や社会に向けて、本学の教育内容を明らかにすること
- ⑤社会に対する大学教育の説明責任を果たすこと
- ⑥学生の意見等を反映できる双方向性のある媒体に発展させていく必要があること
- ⑦教育内容の質を保証すること

この7つの観点は、「誰のため、何のためのシラバスか」という問いに対して、中井先生が示された以下の点とも共通します。



「誰のため、何のためのシラバスか」

- 学 生…学習の量と質の向上、学習の指針、授業選択の手段
- 教 員…授業の質の向上、授業の効率化、授業の方針の伝達、授業全体の構造化と明示化
- 教員集団…カリキュラム全体の一貫性、教育の透明性、入学希望者などへの情報提供、外部からの評価への対応

毎年、慌ただしい中で作成するシラバスですが、理念・目的や方針、カリキュラム全体を見渡すことで、単なる一科目のためのシラバスでないことがわかるはずです。また、授業開始後もインタラクティブに活用できるところが本学のWebシラバスの長所です。

この研修会を期に、授業開始時だけでなく授業期間中も学生と教員が活用するシラバスへと発展していくよう期待しています。

Webシラバスについて

2013年度よりシラバス冊子の印刷をやめ、完全にWebへ移行しました。Webシラバスは、予・復習等の課題や参考資料の提示等、授業運営・学習支援のプラットフォームとして、授業期間中もインタラクティブに活用できます。(※)

※成績評価に関する内容等、変更の際に学生の同意を得る等の配慮が必要場合があります



Webシラバス画面（ポータルサイトからログイン可）

2012年度 大学教育開発センター事業内容

I. FD・教材等研究開発検討プロジェクト

<指定研究プロジェクト事業>

テーマ	代表者	共同研究者
シラバスを基盤とした学修システムにおけるインタラクティブな教育支援ツールの開発	出羽 孝行 (文学部)	安田 圭史 (経済学部)、小長谷 大介 (経営学部)、樋口 三郎 (理工学部)、千葉 晋乗 (情報メディアセンター)
学びのコミュニティの形成	長谷川 岳史 (大学教育開発センター長)	築地 達郎 (社会学部)、津島 昌弘 (社会学部)、田岡 由美子 (短期大学部)
大学院 FD の事例研究	クラフチック・マリウシュ (経済学部)	中川 修 (文学部)、外村 佳伸 (理工学部)、清水 耕介 (国際文化学部)、河村 由紀彦 (教学企画部課長)

詳細はP3をご参照ください。また、3月26日に成果報告会を開催しました。

<自己応募研究プロジェクト事業>

テーマ	代表者	共同研究者
子育て家庭への理解を深めるための視聴覚教材開発 —保育者養成 / 教職課程における家族援助力の育成を目指して—	赤田 太郎 (短期大学部)	中根 真 (短期大学部)、生駒 幸子 (短期大学部)
演習指導高度化のための技術と演習プロセスの融合について	秋庭 太 (経営学部)	
英語教育と異文化理解促進のための『Lunch Time English』を中心とした取り組み	大場 智美 (短期大学部)	阪口 春彦 (短期大学部)、徳田 眞三 (短期大学部)、ホワイト ショーン (経営学部)、進藤 弘樹 (国際部課員)
映像教材『大学生のためのドキュメンタリー制作入門』の制作	小林 直明 (社会学部)	
大教室講義における双方向授業の可能性の追求	畠山 亮 (法学部)	
メディア制作研修への学生派遣による教育への波及効果の検証	八幡 耕一 (国際文化学部)	
保育実践力育成のための教材開発とその検証 —「こども教育学科多目的室」活用を中心として—	和田 幸子 (短期大学部)	田岡 由美子 (短期大学部)、生駒 幸子 (短期大学部)

自己応募研究プロジェクトポスター展示期間：
3月25日 (月) ~ 4月5日 (金)

各プロジェクトの研究成果をとりまとめた「2012年度自己応募研究プロジェクトポスター展示」を3月25日~4月5日の期間で開催いたします。是非足をお運びください。詳細はP12をご参照ください。

II. 教育活動支援プロジェクト

<学期末に実施する授業アンケート>

対象科目 : 2012 年度第 1 学期・第 2 学期開講の外国語科目及び講義科目

※ 理工学部については上記科目に加え、演習、講読、実験・実習、実技・実習、大学院科目及び大学院との合併科目についても実施

(1) 第1学期 (実施期間 学部: 2012 年 7 月 16 日 ~ 28 日 短期大学部: 2012 年 7 月 6 日 ~ 19 日)

■実施状況

科目	講義	外国語	演習	実習・実験	講読	実技実習	計
対象科目(科目数)	1,064	1,016	48	36	18	8	2,190
実施科目(科目数)	820	793	32	14	17	4	1,680
実施率(%) ※	77.1%	78.1%	66.7%	38.9%	94.4%	50.0%	76.7%

※実施率は、調査対象科目数に対する割合を示しています。

(2) 第2学期(実施期間 学部: 2013 年 1 月 7 日 ~ 1 月 19 日 短期大学部: 2013 年 1 月 7 日 ~ 1 月 21 日)

■実施状況

科目	講義	外国語	演習	実習・実験	講読	実技実習	計
対象科目(科目数)	1,328	736	51	11	77	24	2,227
実施科目(科目数)	1,029	578	39	4	65	14	1,729
実施率(%) ※	77.5%	78.5%	76.5%	36.4%	84.4%	58.3%	77.6%

※実施率は、調査対象科目数に対する割合を示しています。

文学部及び理工学部において、新教学システムを利用して、「学生による学期末の授業アンケート」をWebを用いて実施しました。文学部専攻科目においては、第2学期からWebによる実施に移行しました。

<学生による学期半ばの授業アンケート>

対象科目 2012 年度第 1 学期、第 2 学期全開講科目

(1) 第 1 学期 (実施期間 2012 年 6 月 4 日～ 6 月 15 日)

■実施状況

学 期	利用枚数(枚)
第 1 学期	20,715

(2) 第 2 学期 (実施期間 2012 年 11 月 12 日～ 11 月 24 日)

■実施状況

学 期	利用枚数(枚)
第 2 学期	15,555

III. 交流研修・教育活動研究開発プロジェクト

<FDサロン、研修会等>

研修名	日時	講師	テーマ
2012 年度新任教員対象 就任時研修	4 月 1 日 (日)、 2 日 (月)	佐藤 研司 (副学長)、落合 雄彦 (研究部長)、長谷川 岳史 (大学 教育開発センター長)、鶴野 善久 (REC 事務部次長)	2012 年度新任教員対象就任時研修
2012 年度新任教員対象 フォローアップ研修	9 月 19 日 (水)	長谷川 岳史 (大学教育開発センター長)	2012 年度新任教員対象フォローアップ 研修
キャリア教育に関する 講演会	9 月 28 日 (金)	伊藤 健二 氏 (慶應義塾大学)	学士課程教育の実質化とキャリア教育 ～産業界のニーズに対応した 教育改善?～
シラバスに関する研修会	11 月 5 日 (月)	中井 俊樹 氏 (名古屋大学)	シラバスに関する研修会 「誰のため、何のためのシラバスか ～シラバスの書き方、使い方～」
第 1 回 FD サロン	11 月 21 日 (水)	9 学部合同学生会による運営	龍大生が考える龍大生像 ～理想と現実～
第 2 回 FD サロン	2 月 25 日 (月)	佐渡島 紗織 氏 (早稲田大学)	早稲田大学「アカデミック・ライティング プログラム」の事例に学ぶ
第 3 回 FD サロン	3 月 18 日 (月)	藤田 誠一 氏 (神戸大学)	神戸大学大学院経済学研究科における 学部大学院一貫教育の試み
第 4 回 FD サロン	3 月 26 日 (火)	山本 繁 氏 (NPO 法人 NEWVERY 理事長)	NPO 法人 NEWVERY (日本中退予防 研究所) の取り組みについて

初めての取り組みとして、学生FDサロンを開催した他、キャリア教育やシラバス、アカデミックライティングに関する内容等、学内の教育に関連した諸テーマについて研修会を開催しました。

<FD 報告会>

日 時	学 部	テーマ
6月20日	理工学部・理工学研究科	理工学部カリキュラム勉強会
7月3日	国際文化学部	基礎演習A担当者会議
7月4日	文学部・文学研究科・ 実践真宗学研究科	新しい「学び」のスタイルを考える
7月11日	理工学部・理工学研究科	大学のあるべき姿と、それを実現するための教育の質保証・向上の仕組み
7月11日	経営学部	クラウド時代の勉強法—基礎演習におけるタブレットPCの利活用—
10月24日	経営学研究科	経営学研究科の自己点検評価の現状と重点的対応について—教員間の情報共有のために—
10月24日	経営学部	プログラム科目実施報告会
12月5日	経済学部	演習に焦点を当てたアクティブ・ラーニングに関する河合塾の最新調査に基づいた講演・ディスカッション
12月12日	短期大学部	続・正課授業外の教育的プログラムの意義と課題
12月12日	政策学部	学生・地域・大学の関わり～各プロジェクト・大学間連携共同教育推進事業の展開～
12月19日	法学部	教育活動を振り返って
12月19日	社会学部	自己発見レポート関連・入試動向関連報告会
1月9日	経営学研究科	アカデミック・ライティングを通して見た留学生
1月16日	文学部・文学研究科・ 実践真宗学研究科	学生の多様化に応じた教育体制の構築 —愛知淑徳大学「日本語表現」科目を例として—
1月23日	社会学部	キャリア関連報告会
2月8日	短期大学部	龍谷大学の「建学の精神」の理解を深める
2月20日	社会学部	認証評価について

各学部が活発な取り組みを行い、全学でその内容を共有しました。FD報告会以外でも、各学部独自のFDに関する取り組みが年々盛んになっています。

<公開授業と講評会>

経済学部：1 件、法学部：1 件

国際文化学部：5 件、短期大学部：1 件

<FD フォーラム>

日 時：2012 年 12 月 22 日 (土)

テーマ：「大学院教育における課題と大学院FD」

内 容：基調講演、事例報告、パネルディスカッション

2012年度

自己応募研究プロジェクト ポスター展示



RYUKOKU UNIVERSITY
CENTER OF EDUCATIONAL
DEVELOPMENT

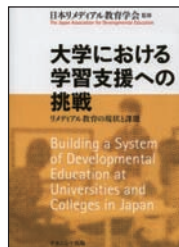
開催期間：2013年3月25日（月）～4月5日（金）
場 所：深草学舎 紫英館1階講師控室前ロビー
瀬田学舎 1号館1階エントランス

コメントについて：「コメントシート貼付ボード」を設置し、ご覧いただいた教職員、学生の方のコメントを共有します。

大学教育開発センターでは、1998年より、教育方法や教材等に関する研究を支援する、「自己応募研究プロジェクト」を実施しています。

2012年度の7件のプロジェクトの研究成果を共有するために、深草学舎及び瀬田学舎においてポスター展示を実施いたします。

新書書籍紹介



これから研究を書く人のガイドブック

出版年月：2008年05月
著者：佐渡島紗織、吉野亜矢子
出版社：ひつじ書房

大学、大学院を卒業した後に常に新しい知識を自らの力で獲得していくための能力として、「書くこと」のための体系化された方法を掲載しています。分かりやすい文章、科学的な文章を書くための留意点を掲載した「文章編」、特に研究内容を書くことに焦点を当て、論文を書き上げるまでの経緯を順に追った「論文編」に分かれています。練習問題やチェックリストを掲載したCDも付属されています。佐渡島紗織先生には、2012年度第2回FDサロン(2013年2月25日開催)に講師としてお越しいただきました。

若者能力開発 働くために学ぶ

出版年月：2012年10月
編著者：OECD
訳者：岩田克彦／上西充子
出版社：明石書店

OECD諸国にとっては、経済成長を支える上で、職場で求められる高度なスキルが重要であると考えられ、職業教育訓練システムは現在、必要とされているスキルを供給することができるのか否か、厳しく問われています。「Learning for Jobs(働くために学ぶ)」は、各国の職業教育訓練システムをより労働市場のニーズに応えることができるよう行われた、OECDの職業教育訓練研究であり、OECD諸国の職業教育訓練政策の国・地域別レビューを行っています。

大学における学習支援への挑戦

出版年月：2012年9月
著者：日本リメディアル教育学会／監修
出版社：ナカニシヤ出版

「教育の質の確保と向上」を目指し、500以上の高等教育機関からのアンケート結果を踏まえ、プレースメントテスト、入学前教育、初年次・導入教育、国語リメディアル教育と大学生のための日本語教育、学修支援センター等について、各大学の事例を豊富に掲載しています。アンケート結果では、多くの大学が成果が出ていない、と実感している中、コミュニケーション能力が高く、職業への目標を持つ学生が多い大学・学部が、学生が成長する大学の共通点としています。

大学の実力2013

出版年月：2012年9月
著者：読売新聞教育取材班
出版社：中央公論新社

全国642大学1995学部を調査し、各大学の広範なデータを公開。「偏差値によらない進路選びの新基準」を謳っています。教員数、退学率・卒業率・就職状況を掲載するとともに、保護者や高校生、高校の教員が各データをどのように読み解き、入学する大学を選べばよいかを解説しています。

大学のカリキュラム マネジメント—理論と実際—

出版年月：2012年8月
著者：中留 武昭
出版社：東信堂

カリキュラムは大学教育の根幹とし、進展するユニバーサル化とグローバル化の中、従来の制度論ではなく、急速に多様化した学生の実態とニーズに対峙し、専門断片化した知を新たな連関のもと統合し、カリキュラムをいかに新編成するか、著者の体験を交え、国の教育政策また高大連携も視野に入れた、具体的研究を行っています。

教育マーケティング 理論の新展開

出版年月：2012年11月
著者：佐野享子
出版社：東信堂

マーケティングの概念がビジネスの領域から非営利組織の活動にまで拡張されて久しい中、フィリップ・コトラー等が提唱してきた教育マーケティング論を乗り越え、新たな視点を提示することを目的として出版されています。未だに「教育に企業の論理は馴染まない」という意見が多い中で、「社会のニーズ」をどのように捉え、どこまで教育に反映させ、教育機関のミッションとどのように両立させればよいのか、その際に教師はどのような役割を果たすのかを理論的課題としています。

初年次教育の現状と未来

出版年月：2013年1月
著者／編集：初年次教育学会
出版社：世界思想社

この十年で急速に普及し、今やほとんどの大学で実施されるようになった初年次教育について、高大接続、ポートフォリオ、ピア・サポート、国際的動向等様々な観点から、理論的背景と各大学の事例について体系的に掲載しています。初年次教育学会設立5周年を契機として出版されました。